心身ともに健康な子どもを育むための保育者の資質について

— 「健康」 保育者効力感からの検討 —

田 辺 昌 吾

保育者の資質向上に資する知見を得るため、心身ともに健康な子どもを育むための保育実践の内容について、保育者効力感という視点から検討を行った。心身ともに健康な子どもを育むためのさまざまな保育行為に対する保育者の信念や実現の見通しを「健康」保育者効力感と定義し、その測定を試みた。結果、一定程度の信頼性・妥当性の確認された14項目が精選された。また、「健康」保育者効力感と現在の生活状況との間に正の関連性が、保育経験年数の浅い保育者、保育者志望学生において認められた。これより、心身ともに健康な子どもを育むことに保育者自身の健康が関連し、自身の健康が保育者としての資質を向上させるための1つの要因であることが示された。

キーワード：保育者の資質向上、保育者効力感、領域「健康」

I. 問題・目的

2008年に幼稚園教育要領と保育所保育指針が改訂（定）され、時代状況を反映し、多様な役割を担う幼稚園・保育所の姿が改めて強調された。なかでも「保育の質」は大きなトピックの1つである¹⁾。秋田²⁾は保育の質の向上のための施策として、第1に、保育内容をより一層充実するための保育・教育カリキュラムの改訂、第2に、保育・教育に当たる保育者の資質向上、第3に、保育の質の評価システムの形成、の3つをあげている。保育の質の向上について論じるにあたり、本研究では第2の保育者の資質向上という視点から検討を行う。

保育者（本稿では幼稚園教諭と保育所保育士を合わせてこのように呼ぶ）の資質向上に関して、保育所保育指針の第七章「職員の資質向上」には、職員の資質向上に関する基本的事項として、「保育所全体の保育の質の向上を図るため、職員一人一人が、保育実践や研修などを通じて保育の専門性などを高めるとともに、保育実践や保育の内容に関する職員の共通理解を図り、協働性を高めていくこと」が謳われている。また、多様化する保育者の専門性について、幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために」（2002）³⁾には、幼稚園教員に求められる専門性として大きく8つの内容があげられている。それらは、「幼児理解・総合的に指導する力」「具体的に保育を構想する力、実践力」「得意分野の育成、教員集団の一員としての協働性」「特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力」「小学校や保育所との連携を推進する力」「保護者及び地域社会との関係を構築する力」「園長など管理職が発揮するリーダーシップ」「人権に対する理解」であり、

非常に幅広いものとなっている。さらに、2010年6月25日付で、子ども・子育て新システム検討会議より、幼稚園・保育所・認定こども園の垣根を取り払い、新たな指針に基づき、幼児教育と保育をともに提供することも園（仮称）の制度化案（幼保一体化案）が発表された⁴⁾。制度の実現に関する議論は他稿に譲るとして、少なくとも、これまで幼稚園・保育所・認定こども園と、別々の施設で保育に従事していた保育者が、同一の施設体系のもと保育を行っていく可能性が示されたのである。すなわち、施設間の垣根を取り払い、すべての子どもの保育に従事する保育者の専門性とはいかなるものであるかを改めて議論することが、早晚必要となると考えられる。

多様な役割が求められ、多岐にわたる専門性の向上が必要とされている現在の保育者であるが、近年、保育者の資質向上に関して「保育者効力感」という視点から検討した研究が増加傾向にある。保育者効力感とは、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」⁵⁾と定義される。この概念は、Bandura⁶⁾の自己効力感（self-efficacy）の理論を応用・発展したものである。自己効力感とは、ある状況において、ある結果を達成するために必要な行動を自分がうまくできるかどうかの予期であり⁶⁾、行動と直接的な関連をもつことが明らかにされている⁷⁾。効力感の高い者は、実践を活発に行い努力し、自分の能力をうまく活かすことができるが、効力感の低い者は、積極的な実践ができなかったり、取り組み自体を避けたりしてしまう⁸⁾ということが研究知見から導き出されている。

これらの研究内容を保育場面に応用したものが保育者効力感であるが、これまで保育者効力感は主に2つの視点から尺度開発、測定が試みられてきた。1つ目は保育場面全般に対する効力感であり、三木・桜井⁵⁾尺度があげられる。「私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う」「私は、子どもの能力に応じた課題をだすことができると思う」といった保育場面全般を問うた項目内容である。2つ目は幼稚園・保育所における子どもの育ちや発達を捉える際の視点である「領域」に特化した効力感であり、西山⁸⁾尺度があげられる。西山尺度は領域「人間関係」に特化した効力感を扱っており、「私は、友達との関係の中で、自己主張や自己抑制を学びとっていけるような保育ができると思う」「私は、子どもの人間関係の育ちについて一人一人の発達課題に即した援助ができると思う」などの項目からなる。また西山は、本尺度内容を踏まえた上で、尺度項目の内容をより詳細にした「人間関係」多次元保育者効力感尺度を開発している⁹⁾。

三木・桜井⁵⁾尺度や西山⁸⁾⁹⁾尺度を使用し、保育者効力感に関連する要因の検討も行われている。保育を専攻している学生の保育者効力感には教育・保育実習を経験することによって高まること⁵⁾¹⁰⁾、保育者効力感には保育経験年数に影響を受け、養成期には比較的高いものの、初任期に最も低くなり、中堅からベテランに至って再び高まるという保育者の成長プロセスが推定されること⁸⁾、保育者の保育者効力感には子ども観（子どもをいかなる存在として捉えているか）と関連のあること¹¹⁾、保育経験年数にかかわらず保育者効力感には保育者自身の自我同一性の形成状態と正の関連性があり、実際の保育実践の程度に正の影響を及ぼすこと¹²⁾、保育士の保育者効力感には職務内容満足感に正の影響を及ぼすが精神的健康には直接的な影響を及ぼ

さないこと¹³⁾などが明らかにされている。保育者効力感の尺度開発や関連要因の検討を通して、健やかな子どもを育むために保育者が行うべき保育実践の内容が明らかにされ、その保育実践を遂行するための資質の向上に関連する要因が示されているのである。

これらの保育者効力感に関する先行研究の内容を踏まえ、保育者の資質向上に資する知見を得るために、本研究では保育者効力感に関する新たなアプローチを試みる。すなわち、多様な役割を求められる保育者の専門性について、より詳細に検討するために、具体的な保育行為にそった保育者効力感の測定を試みる。幼稚園や保育所における子どもの育ちや発達を捉える際の視点として5領域が設定されているが、各領域に特化した保育者効力感の検討が行われているのは、筆者の知る限りでは、先述した西山⁸⁾⁹⁾尺度による領域「人間関係」のみである。他の4領域での検討が保育者のより多面的な資質向上に寄与するものと思われる。そこで本研究では、領域「健康」に着目したい。現在、子どもを取り巻くさまざまな問題が指摘されているが、子どもの健康に関連するものも、その1つである。基本的な生活習慣の未形成や生活リズムの乱れ¹⁴⁾、運動能力の低下¹⁵⁾など、子どもの育ちが危機に瀕している。少子化、核家族化といった家族形態の変化、遊び場や遊び仲間、遊び時間の喪失、自然環境や地域生活の変化など、子どもを巡る環境の変化は急速に進んでいる。こういった状況を背景に、心身ともに健康な子どもを育むことが幼稚園や保育所の役割、すなわち保育者の役割として、これまで以上に求められている。近年の子どもの健康に関するさまざまな問題の現出を考えると、領域「健康」に特化した保育者効力感の検討は緊急の課題といえる。

以上より、本研究では保育者の専門性について、保育者効力感という視点から検討を行う。なかでも保育者のより多面的な資質向上に寄与するため、領域「健康」に着目し、心身ともに健康な子どもを育むために保育者が行うべき保育実践の内容を吟味する。そして、心身ともに健康な子どもを育むためのさまざまな保育行為に対する保育者の信念や実現の見通しを「健康」保育者効力感と定義し、その測定を試みる。そして、「健康」保育者効力感に関連する要因として、現在の保育者自身の健康にかかわる生活状況を仮定し、双方の関連性を検討することから、保育者の資質向上を促進する要因を明らかにする。

II. 方法

A. データ収集の手続きと調査対象者

調査は、大阪府下、山梨県下の幼稚園（2園）、保育園（2園）で勤務する保育者64名、および福岡県下の保育者養成校（短期大学）に通う2年生75名を対象として質問紙法により実施した。2009年12月に、保育者は各園の園長に依頼し配布・回収を行い、学生は筆者が講義終了後に配布・回収を行った。倫理的配慮として、研究目的、得られたデータは研究目的以外に使用しないこと、無記名であり回答者は特定されないこと、調査票の提出は自由であることを調査依頼書に明記した。調査票の有効回収率は、保育者50.0%（32名）、学生97.3%（73名）であった。

保育者の基本属性は、保育者としての経験年数は1年未満5名（15.6%）、1年以上5年未満13名（40.6%）、5年以上10年未満4名（12.5%）、10年以上10名（31.2%）、性別は女性32名（100%）、年齢は20歳代17名（53.1%）、30歳代3名（9.4%）、40歳代10名（31.2%）、50歳代2名（6.2%）、

所属先は幼稚園教諭22名（68.8%）、保育所保育士10名（31.2%）であった。学生の基本属性は、性別は男性7名（9.6%）、女性66名（90.4%）、全員保育者養成短期大学の2年次に在籍しており、調査実施日にはカリキュラム上、幼稚園教諭2種免許状取得のための教育実習と保育士資格取得のための保育実習は終了している。

B. 調査内容

1. 「健康」保育者効力感

幼稚園教育要領の領域「健康」における10の「内容」を上位概念として、それぞれの「内容」ごとに2～3の項目文を作成した。作成にあたっては、幼稚園教育要領解説¹⁶⁾および保育所保育指針解説書¹⁷⁾の「健康」に関する部分や先行研究^{5) 8) 9)}を参考にし、また保育現場での保育行為としての適否を判断するために、保育園園長1名に依頼し内容の吟味を行った。その結果、22項目が精選された(表1参照)。各質問項目について保育者として(学生の場合は保育者になったと想定して)どのくらい取り組める自信がありますかとの教示文に基づき、「非常に自信がある」～「全く自信がない」までの7段階（7点～1点）での評定を求めた。

2. 三木・桜井尺度⁵⁾

「健康」保育者効力感の基準関連妥当性を検討するために、十分な妥当性・信頼性が確認されている10項目からなる尺度を使用した。各質問項目について保育者として(学生の場合は保育者になったと想定して)どのくらいそう思いますかとの教示文に基づき、「非常にそう思う」～「全くそう思わない」までの7段階（7点～1点）での評定を求めた。

3. 現在の生活状況

「健康」保育者効力感との関連を検討するため、現在の生活習慣や生活リズム、疲労感などの健康にかかわる生活状況について、独自に11項目作成した。各質問項目について「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」までの7段階（7点～1点）での評定を求めた。

Ⅲ. 結果・考察

以下の分析にはSPSS for Windows 15.0Jを使用した。

A. 「健康」保育者効力感尺度項目の精選

表1に示した22の保育行為に関する項目が、「健康」保育者効力感を測定する項目として適切であるかを検討し、項目の精選を行った。

1. 項目反応分析

まず、得点分布とその正規性を確認し、次に、1つの項目の得点の動きが全得点に関連しているかを確認するためにGP分析を行った。その結果、すべての項目において上位群と下位群で有意差が認められた。さらに、GP分析と同様の目的ではあるが、各項目得点と全得点との関連をより詳細に検討するためにI-T分析を行った。I-T分析で項目を削除する最も軽い基準は有意性であるが、本研究では四捨五入によって相関係数0.3以上とした。その結果、基準に

表1 「心身ともに健康な子どもを育むための保育者効力感」尺度項目案

※(1)から(10)は幼稚園教育要領領域「健康」の「内容」を表す。

各「内容」の下の項目が、実際の調査項目である。項目文の前の数字は調査票内の番号を表し、文頭に○のついている項目が最終的に尺度項目として使用した14項目である。

(1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する

- 7. 子ども一人一人をありのままに受容し、子どもの心のよりどころとなる
- 8. 子どもが友達とかかわることで充実感や満足感を味わえるように保育する

(2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす

- 3. 子どもの興味や能力などに応じた様々な遊びを展開する
- 14. 子どもが十分に全身を動かし、活動意欲を満足させるように保育する
- 12. 子どもが体を十分に動かし、進んで運動するように援助する

(3) 進んで戸外で遊ぶ

- 2. 園庭の自然環境や遊具を必要に応じて調整し、子どもの興味や関心を戸外に向ける
- 5. 子どもが戸外で過ごすことの心地よさや楽しさを十分に味わえるように保育する

(4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む

- 1. 子どもの発想や興味を大切にし、子ども自らが様々な活動に楽しんで取り組めるように保育する
- 6. 子どもの活動への取り組みの様子を見極め、必要に応じて子どもの意欲を喚起するように援助する

(5) 先生や友達と食べることを楽しむ

- 17. 子どもが集団で食事をする楽しさを味わえるように保育する
- 21. 子どもが食にかかわる体験を積み、食に興味をもつように保育する

(6) 健康な生活のリズムを身に付ける

- 11. 子ども一人一人の生活のリズムを把握し、それらに応じながら、活動と休息の調和を図り保育する
- 9. 保護者に子どもが健康な生活のリズムを身に付けることの大切さを伝え、家庭での生活の仕方についての理解を促す

(7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする

- 15. 子どもが社会生活上の習慣や態度を身につけることができるように援助する
- 4. 基本的な生活習慣を子ども自らが進んで行うように援助する

(8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する

- 13. 集団での生活で必要とされるきまりや約束の大切さに子どもが気づき、自ら守ろうとする態度を育む保育をする
- 18. 子どもが一日の生活全体を見通し、時間の流れや場の使い方を予測して生活できるように保育する

(9) 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う

- 20. 子どもが自分の健康に関心をもち、病気の予防に必要な活動を進んで行うように保育する
- 16. 子どもの体調の変化に気を配り、問題のあった場合は適切に対処する

(10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する

- 10. 子どもが園生活を安心して送れるように、施設設備の安全点検に努める
- 19. 子どもが危険な場所や危険な遊び方を理解し、安全に気を付けて行動できるように保育する
- 22. 子どもが交通安全の習慣や災害時の行動の仕方を理解し、身につけることができるように保育する

満たない項目が3項目(項目番号7、18、20)あった。

以上、項目分析の結果、適切ではないと判断された3項目を除外し、次の因子分析を行うこととした。

2. 因子分析

19項目を用いて因子分析（重み付けなし最小2乗法）を行った。第1因子に0.7未満の負荷量、または第1因子以外に0.4以上の負荷量を示した5項目（項目番号1、2、3、10、17）を削除した。残りの14項目で再度因子分析を行った結果、1因子のみ抽出され、負荷量もすべての項目で0.7以上を示したことから、14項目での単一構造が確認された。14項目での因子負荷量、I-T分析結果（項目-全体相関係数）、各項目の平均値、標準偏差を表2に示す。

表2 「健康」保育者効力感尺度（14項目）

項目	因子 負荷量	項目-全体 相関係数	平均値 (標準偏差)
14. 子どもが十分に全身を動かし、活動意欲を満足させるように保育する	.846	.853	5.10 (1.17)
13. 集団での生活で必要とされるきまりや約束の大切さに子どもが気づき、自ら守ろうとする態度を育む保育をする	.840	.846	5.13 (1.07)
11. 子ども一人一人の生活のリズムを把握し、それらに応じながら、活動と休息の調和を図り保育する	.836	.848	4.90 (1.20)
19. 子どもが危険な場所や危険な遊び方を理解し、安全に気をつけて行動できるように保育する	.831	.838	5.17 (1.09)
4. 基本的な生活習慣を子ども自らが進んで行うように援助する	.820	.833	5.07 (1.10)
15. 子どもが社会生活上の習慣や態度を身につけることができるように援助する	.804	.814	5.17 (1.00)
5. 子どもが戸外で過ごすことの心地よさや楽しさを十分に味わえるように保育する	.798	.809	5.32 (.966)
8. 子どもが友達とかかわることで充実感や満足感を味わえるように保育する	.793	.811	5.12 (1.18)
22. 子どもが交通安全の習慣や災害時の行動の仕方を理解し、身につけることができるように保育する	.788	.807	5.04 (1.09)
6. 子どもの活動への取り組みの様子を見極め、必要に応じて子どもの意欲を喚起するように援助する	.782	.801	4.87 (1.13)
16. 子どもの体調の変化に気を配り、問題のあった場合は適切に対処する	.763	.786	5.15 (1.20)
12. 子どもが体を十分に動かし、進んで運動するように援助する	.758	.774	5.39 (1.10)
9. 保護者に子どもが健康な生活のリズムを身に付けることの大切さを伝え、家庭での生活の仕方についての理解を促す	.756	.787	4.73 (1.25)
21. 子どもが食にかかわる体験を積み、食に興味をもつように保育する	.719	.754	5.06 (1.26)
寄与率(%)	63.4		

B. 信頼性の検討

14項目全体について信頼性係数（ α 係数）を算出したところ、 $\alpha = .959$ と極めて高い値が得られた。これは、尺度全体として領域「健康」に関わる保育者効力感という一貫した概念を測定していることを示すものである。

C. 妥当性の検討

14項目の合計得点と三木・桜井尺度の得点とのPearsonの相関係数を算出したところ、 $r = .737$ ($p < .001$) と強い関連性が認められ、十分な妥当性が確認された。

以上、A、B、Cの検討より、精選された14項目が「健康」保育者効力感を測定する項目として適切であると判断された。幼稚園教育要領の領域「健康」の10の「内容」をすべて含んでおり（表1の○印参照）、心身ともに健康な子どもを育むための保育実践の一端を示すことができたものと考えられる。

D. 「健康」保育者効力感の保育経験年数による比較

作成された14項目からなる「健康」保育者効力感の得点を学生、保育経験5年未満の保育者、保育経験5年以上の保育者の3群間で比較した。その結果、保育経験5年以上の保育者が他の2群よりも有意に得点が高かった（表3参照）。

この保育者効力感が養成期には比較的高いものの、初任期に最も低くなり、保育経験を積むにつれて再び高まるという結果は、西山⁸⁾の「人間関係」保育者効力感においても同傾向が認められている。学生は複数の実習を通して子どもたちとのかかわりを経験し保育現場に対する理解を深めていく。しかし、あくまで実習期間中の限られた時間のみの経験であり、保育現場の過酷さ、難しさを十分に理解できているとは考え難い。実習で、ある程度保育者として振る舞うことができれば保育者効力感は一定程度までは高まるのであろう。しかし、養成校を卒業し、保育者として保育現場で働きだすと、保育現場の過酷さ、難しさと日々対峙することとなり、自分の保育者としての行為に自信がもてなくなることも多々経験すると想定される。保育者としての経験が浅い間は、保育者としてのアイデンティティは不安定であり、保育技術も未熟であることから、否定的な自己評価に陥り、保育者効力感も低くなるのであろう。その後、保育現場での経験を積み、保育者としてのアイデンティティがある程度確立され、保育全般について見通しが立ち、保育技術も身につくことで保育者効力感も高まっていくのであろう。このことが本研究の「健康」保育者効力感においても明らかとなった。この結果より、西山⁸⁾も指摘するように、初任期の効力感の低下を見通した養成段階での指導が求められることが示唆され、その具体的内容について検討する必要がある。

表3 「健康」保育者効力感の保育経験年数による比較（一元配置分散分析）
（平均値、括弧内は標準偏差）

	学生	保育経験 5年未満	保育経験 5年以上	F値	多重比較 Tukey HSD法
N=	73	18	14		
「健康」保育者効力感	71.18 (13.6)	64.44 (5.84)	80.14 (9.85)	6.55**	5年以上>学生* 5年以上>5年未満**

*p<.05、 **p<.01

E. 「健康」保育者効力感と現在の生活状況との関連

保育者の資質向上に影響する要因を明らかにするため、「健康」保育者効力感の関連要因の検討を行った。具体的には、対象者の現在の生活状況、特に生活習慣や生活リズム、疲労感と

いった健康に関わる生活状況をとりあげた。現在の生活状況（11項目）の平均値、標準偏差を表4に示す。この11項目全体について信頼性係数（ α 係数）を算出したところ、 $\alpha = .749$ と一定程度の信頼性が確認されたため、11項目を合算し以下の分析に使用する。

現在の生活状況を前分析で使用した学生、保育経験5年未満の保育者、保育経験5年以上の保育者の3群間で比較した。その結果、学生が他の2群よりも有意に得点が低かった（表5参照）。すなわち、学生の生活習慣や生活リズムが保育者のそれよりも乱れており、健康的でない生活を送っているということが示された。

続いて、「健康」保育者効力感と現在の生活状況との関連を検討するため、上記3群別にPearsonの相関係数を算出した。その結果、学生と保育経験5年未満の保育者において有意な正の関連性が認められた（表6参照）。すなわち、学生と保育経験5年未満の保育者においては、現在の生活状況が良好であるほど「健康」保育者効力感が高まるということである。特に保育経験5年未満の保育者では、 $r = .618$ ($p < .01$)と中程度の関連性が認められた。

保育という営みは決して一朝一夕で成し遂げられるものではない。子どもに対する理解にしても、保育技術にしても、保育者としてのアイデンティティの確立にしても、すぐに達成でき

表4 現在の生活状況の平均値、標準偏差

項目	平均値	標準偏差
1. 夜、よく眠ることができる	4.90	1.66
2. 起床・就寝時間が規則的である	3.96	2.00
3. 自分の健康状態に不安がある(*)	4.41	1.59
4. すぐあくびがでる(*)	3.53	1.34
5. 休養・休息を適度にとっている	4.45	1.45
6. 朝の目覚めはよい	3.57	1.91
7. 疲れがなかなかぬけない(*)	3.40	1.58
8. 食欲がある	5.69	1.31
9. すぐ体がだるくなってしまう(*)	3.39	1.44
10. 普段、適度に運動している	3.37	1.62
11. 1日3食きちんと食べている	4.41	2.22

(*)逆転項目
逆転項目は得点を反転させた結果を示している

表5 現在の生活状況の保育経験年数による比較（一元配置分散分析）
(平均値、括弧内は標準偏差)

	学生 N=	保育経験 5年未満	保育経験 5年以上	F値	多重比較 Tukey HSD法
現在の生活状況	73 (8.95)	18 (7.10)	14 (12.0)	9.06***	5年未満>学生* 5年以上>学生**

* $p < .05$ 、** $p < .01$ 、*** $p < .001$

表6 「健康」保育者効力感と現在の生活状況との関連
(保育経験年数別)
(Pearsonの相関係数)

	現在の生活状況		
	学生	保育経験 5年未満	保育経験 5年以上
	N= 73	18	14
「健康」保育者効力感	.310**	.618**	.228

**p<.01

たり獲得できたりするものではない。保育現場で経験を積むことから段々と身についていくものである。保育経験の浅い間は保育者として未熟であり、心身ともに健康な子どもを育むためのさまざまな保育行為も試行錯誤のなかで実践していると想定される。知識も経験も発展途上の段階だからこそ、自己の現在の生活状況が重要となり、健康的な生活が送れているかどうか心身ともに健康な子どもを育むための保育者効力感に影響してくると考えられる。

一方、ある程度の保育経験を積むと、さまざまな保育行為に対する知識や実践方法も理解できてくると予想される。そこで心身ともに健康な子どもを育むための保育行為を実践する自信をもてるかどうかには、現在の生活状況はそれほど関係せず、経験を活かす力や保育者としてのアイデンティティの確立など、現在の生活状況以外の要因がより重要となってくると考えられる。そのことが、保育経験5年以上の保育者においては「健康」保育者効力感と現在の生活状況との間に関連性が認められなかったことから示唆される。

さらに、学生においては「健康」保育者効力感と現在の生活状況との間に弱いながらも関連性が認められたことから、普段の学生生活を健康的に送ることの重要性が指摘でき、健康的な生活が「健康」保育者効力感につながり、実習での保育実践にも影響を及ぼすものと考えられる。保育者が心身ともに健康な子どもを育むことと保育者自身の健康に関する生活状況とが、特に保育経験年数の浅い保育者において関連性が認められたことから、自己の健康状態が初任期の資質向上を支える1つの要因であることが明らかとなった。

IV. まとめと今後の課題

保育者の資質向上に資する知見を得るため、心身ともに健康な子どもを育むための保育実践の内容について、保育者効力感という視点から検討を行った。幼稚園教育要領の領域「健康」の記述内容を基に測定項目の作成を行い、一定程度の信頼性・妥当性の確認された14項目が精選された。先にも述べたように、子どもたちの健康が危ぶまれている現在、保育現場で心身ともに健康な子どもを育むことは重大な使命となっている。その使命を果たすべく保育者の資質向上が求められている。本研究で作成された「健康」保育者効力感尺度は保育者の資質向上を確認、検討する際の1つの指標として使用することができるものと思われる。日々の保育実践

や研修等で活用されることを期待する。

また、「健康」保育者効力感と保育者自身の健康に関する生活状況との間に、特に保育経験年数の浅い保育者において正の関連性が認められた。保育者の資質向上における「省察」の重要性は、さまざまな場面で指摘されている^{18) 19) 20)}。記録や話し合いを通して自己の保育実践を振り返り、今後活かすことと合わせて、自己の健康に関する生活状況についても、改めて振り返り、健康的でない生活を送っているのであれば、正すことが望まれる。それは、保育者自身の健康が子どもの健康につながる可能性が高いからである。

最後に今後の課題について述べる。本研究は非常に限られた調査対象者から得られたデータに拠っている。今後、より多くの保育者や保育者志望学生を対象に再度検討する必要がある。また、本研究では「健康」保育者効力感の関連要因として現在の健康に関する生活状況を取り上げ検討したが、その他の要因、例えば外遊びの経験や領域「健康」に関する保育内容の理解度などとの関連についても明らかにする必要がある。さらに、保育者のもつ「健康」保育者効力感が在園児の健康にどのように影響を及ぼしているかを検討し、保育者の資質の向上が子どもの健やかな成長に寄与することを実証する必要がある。

引用文献

- 1) 無藤隆・柴崎正行編, 2009, 「新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて」, 別冊「発達」, 29, ミネルヴァ書房
- 2) 秋田喜代美, 2008, 「保育フォーラム『保育の質の評価』」, 保育学研究, 46(2) : 224
- 3) 幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書, 2002, 「幼稚園教員の資質向上について - 自ら学ぶ幼稚園教員のために」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm
- 4) 子ども・子育て新システム検討会議, 2010, 「子ども・子育て新システムの基本制度案要綱」
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/10motto/08kosodate/pdf/youkou.pdf>
- 5) 三木知子・桜井茂男, 1998, 「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」, 教育心理学研究, 46 : 203-211
- 6) Bandura, A., 1977, 「Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change」, Psychological Review, 84 : 191-215
- 7) 坂野雄二・前田基成編著, 2002, 「セルフ・エフィカシーの臨床心理学」, 北大路書房
- 8) 西山修, 2005, 「幼児の人とかかわる力を育むための保育者効力感尺度の開発」, 乳幼児教育学研究, 14 : 101-108
- 9) 西山修, 2006, 「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成」, 保育学研究, 44(2) : 150-160
- 10) 浜崎隆司・加藤孝士・寺蘭さおり・荒木美代子・岡本かおり, 2008, 「保育実習が保育者効力感、自己評価に及ぼす影響 - 実習評価を媒介した因果モデルの検討 -」, 鳴門教育大学研究紀要, 23 : 121-127
- 11) 朝木徹・鈴木由美, 2009, 「子どもの人間関係を育む保育実践の要因 - 保育者効力感と子ども観の関連について -」, 児童学研究 (聖徳大学児童学研究紀要), 11 : 109-119
- 12) 西山修, 2008, 「保育者のアイデンティティと効力感は保育実践に影響を及ぼすか - 領域『人間関係』

について-」, 乳幼児教育学研究, 17:19-28

- 13) 前田直樹・金丸靖代・畑田惣一郎, 2009, 「保育者効力感、社会的スキル及び職務満足感が保育士の精神的健康に与える影響」, 九州保健福祉大学研究紀要, 10:17-23
- 14) 谷田貝公昭・高橋弥生, 2008, 「幼児の生活リズムの変化から見えてくること-基本的生活習慣を中心として」, 教育と医学, 56(8):33-40
- 15) 森司朗・杉原隆・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮・近藤充夫, 2010, 「2008年の全国調査からみた幼児の運動能力」, 体育の科学, 60(1):56-66
- 16) 文部科学省, 2008, 「幼稚園教育要領解説」, フレーベル館
- 17) 厚生労働省, 2008, 「保育所保育指針解説書」, フレーベル館
- 18) 森上史朗, 2000, 「保育者の専門性・保育者の成長を問う-あすの保育者像の構築のために-」, 発達, 83:68-74, ミネルヴァ書房
- 19) 岸井慶子, 2000, 「保育の現場から保育者の専門性を考える」, 発達, 83:16-21, ミネルヴァ書房
- 20) 金ミンジ, 2009, 「新人保育者による省察の意味とその変容を支える支援のあり方-保育実践後の『保育者間の話し合い(対話)』の中から-」, 保育学研究, 47(1):66-78

謝辞

本論文の作成にあたり、調査にご協力いただきました幼稚園、保育園の先生方、保育者養成短期大学の学生方、ご指導賜りました山梨県のG保育園の園長先生、福岡身体組成研究会の先生方に心より感謝申し上げます。